

## 南都東大寺の中近世史料

遠藤 基郎

はじめに

### 日本史研究の特徴

史料に立脚した実証研究：「古文書調査・史料整理する歴史研究者」

アメリカ合州国の場合：重層的な役割分担。「史料整理はアーキビスト、研究者はその成果を利用する」「理論的研究\*への傾斜」(\*「言語論的展開」「ポストコロニアリズム」…)

日本型研究方法の短所と長所：〔短所〕低調な理論研究。細分化。瑣末な考証研究〔長所〕歴史の現場に近づけること(研究者の「欲望」)。歴史観に束縛されない歴史研究の可能性(「できごとの隠蔽や、ひとりよがりな解釈は、極力さけるべき」)

### 史料群を考える着眼点

史料群とは：人間の意志の痕跡。それぞれの時代の人間の営みの中で産み出されたもの。

原則的な着眼点：「なぜ、そのあるいはそれらの文書(記録などなど)が、そのような形でそこにあるのか？」

原則的な「作法」：「1点の文書を解釈するときに、史料群全体のあり方を意識する。」

「史料群全体の性格を見極めるためには、1点ごとの厳密な解釈が必要。」

## 1 東大寺伝来史料のあらまし

### 東大寺図書館にある史料

図書館の整理体系【表】

- ・文書：中世文書を中心とした「国宝東大寺文書」。膨大な未整理近世文書。
- ・記録：近世文書を中心とした冊子体。二月堂関連記録を含む。  
〔参考〕二月堂修中練行衆日記(修二会参加僧侶の記録、平安から現代まで)
- ・経巻：お経。卷子体。  
〔参考〕「小品般若経」(奈良時代、光明皇后発願一切経の一部、残りは明治に皇室に献上)
- ・聖教：仏教の教えについての著述など。冊子体。  
〔参考〕「安養知足相对抄」(浄土教に関する院政期の述作、鎌倉時代の宗性写本)。「調伏異朝怨敵抄」(宗性が朝廷仏事のために編んだ書。文永の「蒙古牒状」を記す)。
- ・院家(塔頭)史料：薬師院や法華堂に伝来した史料。内容は上記と同じ。

### 寺外所在史料

主に明治以降に寺外に出たもの。文書が中心。もっとも大きな固まりが、天皇家へ移動した正倉院文書・東南院文書。(東南院文書は東南院に伝来したものではなく、東大寺惣寺文書のいくつかを選んだもの)

## 文書・記録の生成と伝来

### 東大寺の組織【図】

別当・惣寺（年預五師中心）・院家・役職ごとに生成・伝来。

院家（塔頭）史料：生成・伝来と現状が一致。

図書館所蔵史料本体部分：惣寺生成・伝来を中心としながらも、院家・役職文書が混在。

近代になって集められたものも多数。

留意点：「本体部分」は、すべてが惣寺活動の痕跡であるというわけではない。東大寺寺内の文書・記録を惣寺が集中管理していたわけではない。文書1点ごとの見極め（本来どの内部組織関係したものか？）が必要（例、二月堂関連史料は、寛文四年焼失以前は堂内唐櫃に存在）。

## 2 文書・記録管理に関する史料（文書目録）

### 文書（史料）目録類研究の長所

文書群全体を見通せる。

各時代毎の文書（史料）目録類の比較：それぞれの時代にどのような関心で史料・記録が蓄積・管理されたのかの究明。

### 院政期、別当寛信（勸修寺）による整理と出納記録

【史料一】仁平三年（一一五三）四月二九日東大寺諸莊園文書目録

その際に、文書櫃を五合作成したと推測（現在一部が正倉院にあり）。

莊園関連文書が中心的地位。朝廷による莊園整理令、朝廷・国衙による課役、他の領主との訴訟の証拠のために。

【史料二】保元四年（一一五九）四月八日～90代別当寛遍代文書出納記録

古代的性格が濃厚：厳格な文書管理。別当の代単位での管理。

出納記録の終焉は鎌倉末期：東大寺における朝廷中心体制の終焉。対幕府関係の重点化。別当の役割の後退と寺内惣寺の上昇。

### 鎌倉後期の大勸進聖守の整理、年預による文書勸渡帳の出現

【史料三】弘安三年十月二九日聖守の唐櫃銘

聖守は建治三年（一二七七）～弘安五年（一二八二）の大勸進\*。真言院・新禅院中興の祖。

\*大勸進は、平家の焼き討ちによって焼失した大仏殿復興のために設置されたポスト。寺内設備の修造にあたり、そのための財源を管理した。初代は重源。歴代大勸進は鎌倉幕府とつながりを持った。

対モンゴル戦争での祈祷「成功」の見返りとして、寺院復興運動の盛り上がり。

【史料四】正応二年（一二八九）二月二五日東大寺年預宗算文書記録勘渡帳

寺内勢力の主体性の確立。対政府対策でありつつも、請定類を含むなど集団全体の運営記録の保管としての性格が強い。

勘渡帳の終焉は、嘉吉年間（一四四一～四三）：年預五師中心の経営体制の破綻（財務の中心は油倉へ）。それが文書管理体制にも大きな影響を及ぼしたのか。

### 15世紀前半の一時的復興

【史料五】天文二年（一五三三）八月二〇日本僧坊供方文書勘渡状

【史料六】大永七年（一五二七）七月八日大仏殿灯呂方文書勘渡状

学侶方\*中心の復興運動。\*惣寺の中でも特に教学を担う学僧の集団。

背景：永正五年（一五〇八）三月一八日講堂・三面僧坊が焼失。翌六年四月一三日再建の論旨。永正一三年（一五一六）四月 東大寺大勸進僧、同寺講堂本尊を再建のため、女人の大仏殿堂内参詣を認め、散銭を資用に充てる。

近世的な経営体制の兆し：十二大会中心の平安以来の体制化から、追善講の主要行事化。納所方式（担当学侶方式）の拡大。

戦国末期の壊滅的打撃：永禄一〇年（一五六七）一〇月一〇日三好・松永の兵火により大仏殿以下焼失。

## 3 近世社会と東大寺史料

### 官家方帳簿の発生

【史料七】慶長二年（一五九七）八月一日官家方算勘帳

官家方：文禄年間（一五九二～九五）に出現。年預五師など寺内執行部によって構成されるか。

官家方算勘帳の内容：武家政権・朝廷との交渉経費が中心。政治体制の変化によって、中央政界交渉の重要度が増したためか。

### 年中行事記の出現

【史料八】寛文四年（一六六四）九月日東大寺年中行事記録（年預五師実賢）141-16

年中行事記の内容：年預五師が書き継いだ年間記録。寛文年間後半から出現。当初は数年書き継ぎ。一年一冊は、元禄元年（一六八八）から。

出現の背景：

- 1 寛文四年焼失した二月堂の再建。元禄元年大仏再建（二月別当濟親法親王就任、四月大仏殿木作始）

〔参考〕「紺紙銀字華嚴経」（奈良時代、通称「二月堂焼経」）

〔参考〕「大仏修復勸進帳」

- 2 幕府の宗教政策の変更。寛文四年四月奈良奉行土屋利次就任（それまでの中坊秀

政・時祐は、中世は興福寺被官の家)。寛文五年諸宗寺院法度の制定(初の統一的寺院法度)。

中世東大寺には、年中行事記にあたる公務記録がない。年中行事記の出現は東大寺における近世的社会体制への対応。

### 文書(史料)目録類の不在(?)

年預五師間の文書引継ぎ:文書包・文書櫃。

中世の年預五師文書勘渡状にあたる文書引継目録が見えない。

(仮説)勘渡状の代替物があったか。文書包うわ書・文書櫃箱書(ふた裏書他)。

むすびにかえて

喪われた史料達:東大寺文書は古代~中世前期の文書の宝庫ではあるが、中世後期~近世初頭にかけては残存状況がよくない。現存する史料のみで全体を復元することの危険性。

「残っていないこと」の理由を考えることも重要。

「史料が残らないこと」は、「事実がないこと」と同義ではない。

### 【主要参考文献】

堀池春峰『南都仏教史の研究』上 法蔵館、1980

皆川完一「公験唐櫃と東大寺文書」『東京大学史料編纂所報』7、1983

永村眞『中世東大寺の組織と経営』塙書房、1989 同『中世寺院史料論』吉川弘文館、2000  
『東大寺文書を読む』堀池春峰監修 思文閣出版、2001

森哲也「平安~鎌倉時代における東大寺文書の出納について」1998年11月史学会大会報告 同「仁平三年東大寺諸荘園文書目録の基礎的考察」『史淵』137、2000 同「仁平三年東大寺諸荘園文書目録について」『山口県史研究』9、2001

遠藤基郎「『筒井寛秀氏所蔵文書』所収の弘安徳政関連文書」『南都仏教』76、1999

杉田善雄『幕藩権力と寺院・門跡』思文閣出版、2004